

からきかな かりもはやさぬ いぬ蓼の 穂になる程に 引く人のなき/藤原為家 〈イヌダテ〉 「夫木和歌抄」
風わたる浅茅(あさぢ)が末(すゑ)の露にだに宿りも果てぬ宵の稲妻/藤原有家朝臣 〈浅茅〉 「新古今和歌」
月草のうつろひやすく思へかも我が思ふ人の言も告げ来ぬ/大伴坂上家之大娘(おおとものさかのうへのおほいらつめ) 〈月草〉 「万葉集」
道の辺の 茨(うまら)のうれに 延(は)ほ豆の からまる君を はかれか行かむ/丈部鳥(はせつかべのとり) 〈豆〉 「万葉集」
打つ田には稗(は)しあまたありといへど選えし我れぞ夜をひとり寝る/柿本人麻呂 〈稗〉 「万葉集」
高円の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも/大伴家持(おおとものやかもち) 〈かほ花(昼顔)〉 「万葉集」
をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも/中臣女郎(なかとみのいらつめ) 〈おみなえし〉 「万葉集」
さう莢(けふ)に、延(は)ひおほとれる屎葛(くそかずら)、絶ゆることなく宮仕へせむ/高宮王(たかみやのおおきみ) 〈クソカツラ〉 「万葉集」
吾が屋外に 蒔(ま)きし瞿麦 何時(いつ)しかも 花に咲きなむ なそへつつ見む/大伴家持 〈瞿麦(カワラナデシコ)〉 「万葉集」

